

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

## モミジバフウ フウ科

- ・学名 *Liquidambar styraciflua*
- ・園内に植栽



晩秋、県立図書館の玄関前に、大きなモミジのような美しい紅葉が散っていたことをご記憶ではないでしょうか。玄関の両側に並んだこの木、葉の形からよくモミジ・カエデの仲間とまちがわれますが、赤の他人のそら似で、モミジバフウといいます。

モミジバフウは北米東部原産の落葉樹で、街路樹や公園樹として植えられますが、成長すると高さ20mにもなるので、個人宅には植えられません。紅葉が美しいことではモミジと甲乙つけがたいので、秋にご紹介してもよかったのですが、モミジバフウはモミジと違って、冬枯れの季節にも個性を主張してきます。

まず、果実です。木の梢のほうをみると、球形の実がたくさんぶらさがっているのが見えます。たいてい、いくつかの実が下に落ちているので、ひろってみましょう。遠目に丸く見えた実は、じつは硬く乾いた小さな実がたくさん、球形に集まったものであることが



わかります。このように多数の果実が密集した構造の実を「集合果」といいます。なじみのあるところでは、パイナップルの大きな「実」も集合果です。

モミジバフウの集合果はとげとげしていて、強く握ると痛い。公園の芝生に木陰をつくるには向いていない木でしょう。うっかりこの上に座りたくはありませんから。このように地面に落ちている果実は、殻がはじけて種子が飛び散ったあとで、ほぼからっぽです。とげとげの間に見える裂け目に、もともとは小さな種子がはいっていたのです。種子はアカマツの種子を小さくしたようなものです。少くくは残っているかもしれないので、さがしてみてください。

もっと個性的なのは、木の枝です。かろうじて手が届くくらいの高さにある枝を見てください。すんなりと伸びた枝ではなく、やけにごつごつして見えます。近寄って詳しく見ると、枝に沿って灰色の翼のようなものがついているのがわかります。これは樹皮のコルク層の一部が発達したものです。枝に翼ができることでよく知られているのは生け垣などに使われるニシキギですが、このモミジバフウのほうが翼が厚く迫力



があります。この翼が何のためにあるのかはよくわかっていません。高いところにある枝には翼が出ないので、シカなどに枝をかじられるのを防いでいるのかもしれませんが。日本ではモミジバフウはモミジバフウでしかありませんが、北米ではいろいろな園芸品種が流通していて、枝の翼がよく出る品種というのもあります。

モミジバフウやその仲間は、欧米では香りのよい樹液・樹脂を出す木として知られていました。学名の *Liquidambar* は、リキッドアンバー、つまり液体の琥珀(こはく)という意味です。琥珀は古代に生きていた

植物の樹脂の化石で、燃やすとよい香りを放ち、お香とされることもありました。それを連想させたわけです。モミジバフウの英名はsweetgumで、これも「甘い樹脂」を意味しています。モミジバフウやその近縁種の樹脂はスチラックスと呼ばれており、その成分として発見された化合物がスチロールと名付けられ、後にスチレンと改称されました。発泡スチロールなどの原料となるスチレンは石油化学製品のイメージが強いですが、最初は植物由来の成分として発見されていたのですね。

注)日本語のウェブサイトではスチレンはエゴノキ科の植物の樹脂から発見されたと書いているものが多いですが、欧米の多くの文献はモミジバフウまたはその近縁種の樹脂から得られたとしています。

モミジバフウなどフウ科の木は、3裂あるいは5裂した葉をつけ球形の集合果がぶらさがってつく特徴から、プラタナスの仲間(スズカケノキ科)ともよくまちがわれます。プラタナスも球形の集合果をつけますが、これは長い毛の生えた果実がぎゅうぎゅうに集まったもので、それがほどけて風に飛ばされると芯の部分だけが残ります。ぶらさがっている姿は似ていますが、構造

はまったく異なります。また、プラタナスの仲間はモミジバフウのように美しく紅葉することはなく、黄色から茶色に変わる途中で渋い渋い色に見えることがある程度です。

(龍谷大学農学部・三浦励一)

- ❁ モミジバフウは [ここ](#) で見ることができます。  
(クリックで Google マップにリンク。10m程度の誤差が出る場合があります。)